

雁の記

川越散策日記

土蔵造り商家

荒牧 澄多記

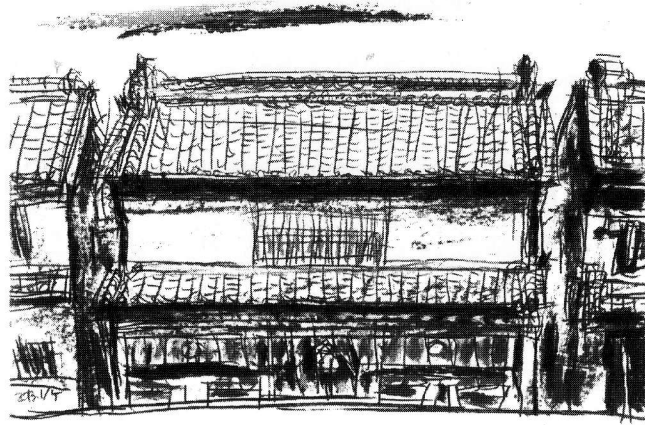
(高二十七回)

明治二六年(一八九三)の川越大火によって形成された蔵造りの町並み。今や、観光客が多く集まる人気スポットとなりました。皆さんが高校に通っていた頃は、こんな観光地になるなんて思いもよらなかったことでしょう。ここへ至るま

すのでまたの機会、今回は、蔵造りについて見てみましょう。

蔵は、商品や家財を、火災や水難、盗難等から安全に保管貯蔵する目的で建てられたものであり、その素材も木や石、レンガなど多様です。しかし、すぐ思い浮かぶのは、木で骨組みを

作り、外に面する部分を土で塗り籠めた土蔵でしょう。



スケッチ 大護 皓夫 画 (高 14 回)

蔵が土で覆われるようになるのは、平安から鎌倉時代にかけてで、板壁に土などを塗り籠めた建物が建てられたようです。現在残っている土蔵を描いた資

料で最も古いものは、延慶二年(一三〇九)に成立した「春日権現験記絵」で、火事で焼け残った白壁の土蔵に家族が避難している様子が描かれています。この絵では、屋根も白く描かれています。その白く四角いさまから、豆腐蔵という名が生まれました。

昔は、瓦葺きが高価なため、お寺以外で葺くことなかなかなありません。一般の建物では、板葺きや草葺きでした。土蔵も例外ではありません。土で覆った建物の上に、板葺きなどの屋根を置くという置き屋根式でした。今でも、川越近辺の農家に見られます。

蔵造りは、一七世紀の頃に江戸で生まれたといわれています。外壁を厚い土壁で覆い、開口部を土戸などで閉じるという土蔵の構造を生かしたまま、店舗や住まいを目的として建てられたもので、関東地方を中

心に東北や北陸の一部に広まっていきました。わが国で、現存する蔵造りの最も古い例は、札の辻のそばに建つ寛政四年(二七九二)建築の重要文化財大沢家住宅です。この建物は、明治の川越大火の際に、周囲の町家が焼き尽くされた中であって類焼を免れ、その防火性能を遺憾なく発揮しました。

川越の蔵造りの特徴は、大きな鬼瓦とかげ盛りです。このかげ盛りは、竹で下地を作り漆喰を塗って仕上げたもので、屋根をもつとも印象付けています。軒は、三尺毎に腕木をだして出桁を受け、深い軒をつくれます。

窓も観音開きが多く見られます。火事の恐ろしさから防火性能を重視したからでしょう。時代が下るにつけ、格子の入った横長の窓に代わり、二階の居住性能が高くなります。なお、仲町の亀屋のように観音開きが開いた時も閉じた時も、隣り合う扉と寸分たがわず組み合わされる様は、職人技のすごさを思い知らされます。